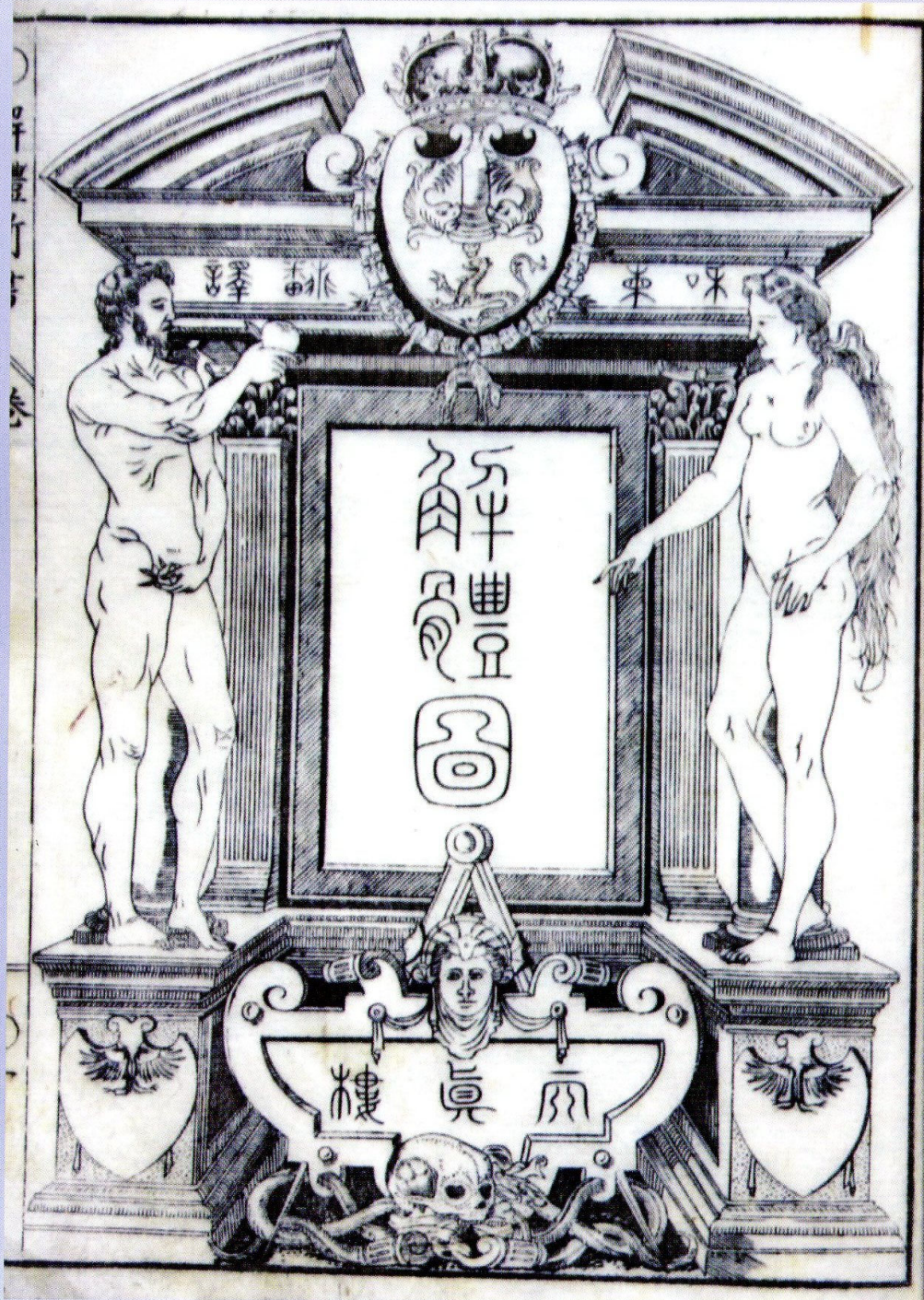


「杉田玄白賞」のあゆみ

～第1回から第10回までの記録～



「杉田玄白賞」記念冊子



平成20年度（2008年度）

第7回「杉田玄白賞」受賞者（応募15件）

受賞当時 医療法人玄真堂川島整形外科病院 理事長

川島 真人氏

日本で初めて西洋医学書を訳した「解体新書」を著すのに尽力した杉田玄白、前野良沢ら蘭学の歴史の研究、玄白の養生論の研究、当時のオランダの薬膳料理や正月料理、薬草風呂の再現・広報活動等が、第7回「杉田玄白賞」に選ばれました。

受賞内容【杉田玄白らの医学史研究や「医食同源」の思想に関する広報活動等】 《医学史研究》

中津市は第2次世界大戦中の米軍爆撃から逃れた城下町であり、御殿医の村上家・辛島家・大江家から数千点に及ぶ医学史料が発見されました。川島氏は、九州労災病院に赴任して以来、天児民和先生から「中津出身の蘭学者で、整形外科の開祖・田代義徳先生の養父である田代基徳に関する『医学史』的調査をやってはどうか。」という助言を受け、郷土史家の松山均先生・今永正樹先生や九州大学文学部のミヒェル教授と一緒に調査を続ける中で、村上医科資料館、大江医家史料館、中津城三階蘭学展示室等も立ち上がり、多くの論文執筆を手掛けてきました。

《蘭学研究》

川島氏は、中津藩の前野良沢と杉田玄白らによって出版された『解体新書』の偉業はもちろんのこと、この事業がいかに大変で努力を要したのかを知り、前野良沢や杉田玄白の墓を訪ねるとともに、解剖図を描いた小田野直武にも興味を持ち、出身地の角館(秋田県)を訪ね、その奇才ぶりを見出した平賀源内、そして採用した杉田玄白のマネジメント力に感動し、蘭学研究を深めていきました。

《蘭学者の食文化》

川島氏は、蘭学研究の傍ら、楽しみとして蘭学者の食文化に関する考え方に興味を示されました。特に、中津藩・奥平昌高は前野良沢らが辞書もなく、翻訳に苦勞していたことに着目し、自らもゾーフ、ブロンホフ、シーボルトからオランダ語を学び、文化7(1810)年に和蘭辞書の『蘭語訳撰』、文政5(1822)年に蘭和辞書の『中津バスタード辞書』を刊行していること、そして、「オランダ人の体格の良さは食生活からくるのではないかとオランダ料理を食べた」という記録があることに着目されました。

そこで、川島氏は、別府短期大学の江後迪子教授にオランダ正月について学び、神戸市内のホテルで開催された「オランダ正月」に参加し、その料理の詳細を総料理長から学びました。その結果、オランダ正月料理は、獣肉と魚類、野菜、果実の脂肪、タンパク質、炭水化物、ビタミン類が豊富に含まれていることがわかり、日本人の貧弱な体格を改善する薬のようなものだと考え、大槻玄沢が前野良沢や杉田玄白を招いて行ったオランダ正月の会「新元会」を44回も開催されたことも知りました。その後、個人や団体の協力を得て、オランダ正月料理を楽しんできました。

《蘭学や食文化に関する会の立ち上げ》

川島氏は、これらの勉強をもとに、「キャラバン中津」のまちづくり団体とともに、定期的に市民向けの「蘭学の里勉強会」を開催するとともに、薬膳料理を楽しんできました。

また、2004年には「マンガラゲの会」を立ち上げ、その会では、毎年、大江医家史料館の裏庭に薬草を植栽し、薬草による健康管理等も勉強するとともに、江戸時代から大江家が行っていた薬草風呂「大江風呂」を再現し、蘭学の歴史についても勉強しています。

寄稿 【杉田玄白賞について】

2008年12月14日、思いがけなく福井県小浜市で第7回の“杉田玄白賞”を受賞し、本当に心から嬉しく思いました。

私は1944年に大分県中津市船場町に生まれましたが、すぐ近くに福澤諭吉の実家があることから、幼い頃はその諭吉の家をよく掃除をしたり、遊んだりしていました。小学5年生の時に松山均先生という大変すばらしい教師に巡り合い、先生の郷土史に関する研究と熱心な指導に感化され、福澤諭吉の伝記を読まされ、そして図書委員にされて読書と感想文を書くことを習慣づけられました。

このことは東京医科歯科大学医学部入学後も新聞会の編集長となって記事を書くことにもつながり、卒業後、医師になっても論文を書くことで苦しみながらも楽しみの一つになりました。

福澤諭吉の『福翁自伝』を読む中で、諭吉が長崎に留学し、また大坂の適塾に学び、蘭学を勉強したということから非常に大きな影響を受け、そしてやがてアメリカやヨーロッパを訪問し、慶応義塾を創設するという大きな業績を上げた事を知りました。

そのことから蘭学というものに興味を持っていましたが、1972年に九州労災病院に就任した時に天児民和病院長（九州大学名誉教授）から、私の故郷である中津は前野良沢から福澤諭吉至る“蘭学の里”であり、また多くの蘭学者、中でも整形外科の開祖・田代義徳先生やその養父の田代基徳先生が外科学会を創設するなど日本の医学史に大きく貢献した土地柄だということを知りました。

毎日の忙しい臨床と“潜水病に伴う減圧性骨壊死”という大きな研究テーマを与えられ、毎年のように外国の学会に発表に行くかたわら土曜、日曜などは時間を見ては中津市の医学史研究のための資料を探し、やがて村上医家の3,000点にも及ぶ史料が発見されて、今永正樹先生（郷土史家）たちと村上医家史料館を立ち上げることができました。その後、『バスタード辞書』で有名な大江春糖の家や華岡青州塾の出身である大江雲澤が明治4年（1871）中津医学校を創設して初代校長になったということがわかり、その大江雲澤の家を保存することに努力をし、村上医家史料館に次ぎ大江医家史料館も現在、中津市の史料館となっています。また医学史を研究する中で“蘭学と食文化”ということにも興味を持ち、前野良沢の弟子でもある大槻玄沢のオレンジ正月料理のレシピを青山学院大学の片桐一男教授より入手し、中津最古の西洋料理店“ヤバケイクラブ”の土生望社長と共にオレンジ正月料理の再現をしました。そしてそのオレンジ料理が、当時の日本人の貧弱な体格を改善するのに非常に役立ったということを知りました。このオレンジ正月料理の会は青山学院大学の片桐一男教授のご指導を仰ぎながら、その後もヤバケイクラブにおいて続けられ、中津ロータリークラブや2000年の日蘭修好四百周年で来日したオレンジ人4人も交えてオレンジ正月料理を楽しみ、間違いなくオレンジの家庭でも食されていることを確認しました。その後中津の町興しグループの“キャラバン中津”と共に薬膳料理を作って食したり、最近では蘭方医・田中信平、通称“田信”の考案した文政時代の長崎料理などを復元して楽しんだりして現在に至っています。

このように歴史に学びながら“食と健康”をテーマに現在も色んな事を続けており、小浜市から頂いた奨学金50万円は、このような普及活動をしている中津市教育委員会へ30万円を寄付し、10万円は中津ファビオラ看護学校の図書費として、また残りの10万円は私が主催している中津医学史・蘭学史の研究会“マンダラゲの会”に寄付をさせて頂き、現在大江医家史料館の裏庭にある薬草園の運営に活かしています。年2回開催する“マンダラゲの会”は中津藩蘭学の顕彰に努めるべく講演会や中津市内医学史散歩を行っています。マンダラゲの会では、

本徳照光先生を中心に村上医家に残る前野良沢の残した一節截ひとよざりという室町・鎌倉時代から伝わる古代の笛を二十二本も復元し、当病院では毎月一回、市民の人達と共にその笛を吹く練習を続け、昨年からは中津城の行事などにも出演しています。村上医家史料館の方は、この資金のお蔭で村上医家に残った3000点の史料の翻訳が九州大学のミュヒェル名誉教授によって開始され、現在7冊もの史料集が出版されています。中津藩蘭学の研究は一層詳細に深くに広がってまいりました。

この“杉田玄白賞”のお蔭で中津における蘭学研究ならびに食文化の研究は市民の皆様から大いに評価されています。

このようなきっかけを与えて頂きました“杉田玄白賞”に対して大分県中津市から本当に心からの感謝の言葉を捧げますと同時にこのような事業に貢献している小浜市の市長さんをはじめ皆様方の偉大なる情熱に私達も大いに学ばなければならないと思っています。小浜市のご厚意に感謝するために『杉田玄白賞記念誌』も刊行いたしましたので、ぜひとも小浜市の市民の方々にも御笑覧いただければ幸いです。今後とも“杉田玄白賞”のますますの発展と小浜市の御隆盛を心からお祈り申し上げます。

中津ロータリークラブでオランダ正月料理の会を開催(ヤバケイクラブにて)



文政年間の蘭方医、田中信平の伝承料理を復元(朱華にて)



中津城の雛まつりで一節截ひとよざりを演奏(最前列右端が筆者)



ミュヒェル教授による村上医家史料の解説



当院での一節截ひとよざりの練習風景

《川島真人氏のプロフィール》

1944年大分県生まれ。1969年東京医科歯科大学卒業。1972年から1981年まで九州労災病院に勤務し、1981年から川島整形外科病院を開業する。2004年から日本高気圧環境・潜水医学会副代表理事を務め、2010年からは大分県病院協会会長も務める。

著書に2006年発行『水滴は岩をも穿つ』梓書院、2010年発行『近代医学を築いた開拓者達 第7回杉田玄白賞受賞記念誌』西日本臨床医学研究所などがある。